

キルギス山遊記・天山&パミールトレッキング 報告

(報告) 秋田 勲男、岡田 捷彦、河内 達人、古林 宏

◎日程 : 2015 年 7 月 15 日 (水) ~ 30 日 (木)

◎メンバー : 古林宏 (L), 秋田勲男, 岡田捷彦, 河内達人, 齋藤光子, 斉藤幸子, 中道宏, 星野真知子

◎コース : ビシュケク市→アラ・アルチャ山 (2, 100m) →アク・サイ氷河 (4, 500m) →
→アチク・タシュ B C (3, 700m) →アドバンスド B C (4, 200m) →オシュ→
→チッカン溪谷→ビシュケク市→イシク・クル湖→ビシュケク市



◎ 何故キルギスタンへ？

何故キルギスに行くことになったのかというのは昨年の暮れのこと、次回の海外山行を何処にするかと幾人かの人と話し合ったときに、アメリカとヨーロッパ、それに中央アジアが候補地として挙がった。アメリカは西海岸のヨセミテやマウントレーニエ、オリンピック公園の辺り、ヨーロッパはチロル地方のお花畑をイメージしていた。中央アジアが候補に挙がったというのは京大学士山岳会の後援で前田栄三氏が代表幹事を務める雲南懇話会というところでシルクロードやパミール高原の話聞き及んだことがきっかけとなった。3 候補地の中でどこがいいかという話になった時に、もう残り少ない人生だから一番行きそうにないところを最初に行って置こうという話になり、結果として難しい場所を選択することになったと言う、そんな経緯である。

◎ キルギスという国は元来 40 の民族から成り立っていたという

キルギス国は中央アジアに位置する旧ソビエト連邦の共和国で、その周囲にカザフスタン、中国、タジキスタン、ウズベキスタンとの国境を接している。そういえば、「キル」と言う接頭語には 40 という意味合いがあったように思う。現在は 80 の民族がいるそうだ。場所によっては境界線もはっきりしない様な隣国と金網一枚を隔てただけで、決して友好的ではない国際関係は常に紛争の種をはらんでいる。私たち単一民族の日本人にはよく見えない複雑でいろんな社会、歴史問題が常に内在しているようだった。案内してくれたガイドの話は中央アジアの歴史や文化、政治などにおよび、異国での自然を感受することと等しく、新鮮な知見を得たことを大いに楽しんで喜んだ。

を選択することになったと言う、そんな経緯である。



(ビシュケクからスタートをして 1,350 キロを移動する)

◎ 心に刻まれ印象に残る風景

今回の山行で見た風景、山並みというのはこれまでの登山で訪ねたヨーロッパや他の海外の地域とは異なったものとなった。目にする景観は大地形成の経緯が深く刻み込まれ、その壮大さと峻厳さに触れて、時間軸の大きさに比して人間の営みの如何に小さいかを改めて感じさせるものとなった。

キルギスはその国土の半分近くが高度 2~3,000 メートルの高原、もしくは山岳地帯である。南には、あの天山々脈が東西に 2,500 キロ（日本列島とほぼ同じ）の壁をつくり、それと直角に交差するようにパミール山脈が 250 キロあって、その間に広大なパミール高原が広がっている。その地点というのは周

辺にカラコルム山脈とヒマラヤ山脈、崑崙山脈、さらには天山山脈にトルケスタン山脈と、世界の名だたる大山脈が一箇所に集まっている。また、東パミールは年間降雨量が 200 ミリメートル以下のものすごく乾燥した山岳砂漠地帯であり、一方の西パミールは年間降水量が 2,000 ミリ以上に達すると言う湿潤な所。高所では大きな氷河が発達して決して高原と呼べるような場所ではない。そんな国土の北の端から南の端へとトレッキングする、登山とは言うものの大変な長旅ではある。

◎ アラ・アルチャ山とアク・サイ氷河沿いの登山（7月15日～7月19日）（河内 記）

成田から飛行機を乗り継いで 19 時間、キルギスのマナス国際空港に着いたのは現地時間で朝の 4 時 40 分であった。日の出間もない早朝の筈だがそんな雰囲気は全く無く、まるで昼前である。緯度が高い所為かそれとも標準時の設定の問題か、或いは時計の時刻合わせが出来ていないだけなのか、それだけでなくとも時差呆けした頭がこんがらがってくる。空港の名前となっている「マナス」とは、何でも 1000 年以上も前にキルギスを統一した偉～イ王様の名前だそうだ。その偉～イ名前の空港を出た所で、ガイドのヤリック（Yaroslav Yarik）さんが出迎えてくれた。長身の 26 歳の好青年である。



（ガイドのヤリックと恋人）

恋人が首都ビシュケクの内装会社に勤めているとか（この恋人とは後日 BC テントでお会いした）。空港から車で約 1 時間、ビシュケクの街中にあるアルピニストホテル（三ツ星）に立ち寄り、3 泊 4 日分の荷物だけを持って残りを置いておく。更に車に乗りアラ・アルチャ自然公園内のゲストハウスに着いたのは午前 8 時半。公園の中の可なり綺麗なホテルである。レストランでは昔懐かしい「ハエ取り紙」にお目にかかる。そのレストランで、朝食だか昼食だかハッキリしないのを頂いて近辺散策に出かける。渓谷沿いに 2～30 分下って、小さな橋を渡る。結構急流である。高度順化が目的の一つでもあり、ゆっくりと歩く。途中遭難者墓苑をお参りする。墓苑と言っても金柵で囲まれた場所に、てんでばらばらの大きさの墓が概ね同じ方向を向いて建てられているだけである。アイゼンや登山靴の朽ち果てたのが供えられた墓も有った。アイゼンや登山靴の朽ち果てたのが供えられた墓も有る。墓石に刻まれている文

字がロシア語（ひょっとしたらキルギス語？）なので読めないが、西暦と思われる4ケタの数字が2つ並んでおり、それが何を意味するか、特に右側の4桁の意味だけは理解できた。昼過ぎにはゲストハウスに戻ったが、ハウスの前の針葉樹には珍しい松ボックリを見つけた。

17日、いよいよ今回の山行での最初の目標、アク・サイ氷河を4,500mの地点まで登る道のりの初日だ。ここゲストハウスの標高は2,100m、2日間かけて2,400mを登る事になる。

4,000m以上の高度は何回か経験しているが今までは精々1日に5~600m程度を登るものであった。1日に1,200m、矢張り高度障害が心配だ。昨日下った溪谷を眼下になだらかな道をすすむ。道は良く整備されていて歩き易い。長く高く伸びた針葉樹の先っぽが美しく尖っている。カナダに来たようだ、との声が飛ぶ。この針葉樹が生えているのは溪谷沿いだけである。一步離れるとそこは禿山である。ここだけでなくキルギス中で行ったところ全ての川沿いは樹が青々と茂っているものの少し離れるとそこは禿山か精々草原である。



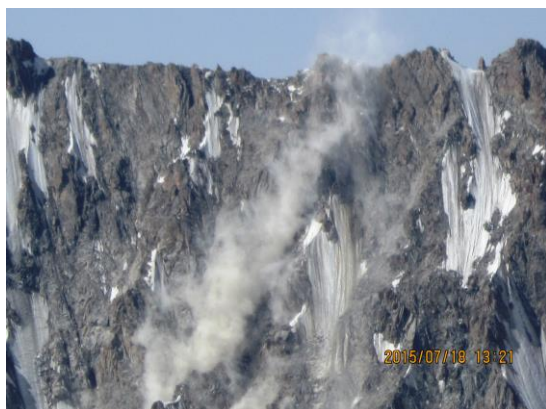
私、河内は高度障害の他、実はもう一つ不安を抱えていた。日本を発つ1か月前、多摩川の源流「笠取山」でギックリ腰をやってしまった。何も山の上でやる事もないのに、ザックに腰を掛けていて不用意に腰を上げかけた途端「ギクッ」ときた。その時はなんとか這う這うの体で下山したのだが、それから1か月、医者に通い、湿布を貼って、薬を飲んで、何とか必死に頑張っただけで間に合わせたが丸々1か月歩いていない。高度順化のための富士山も登れず仕舞いであった。

そんな訳で腰と高度障害を気にしながらのトレッキングとなったが、ゆっくりペースで歩いて頂いたのと、途中で十分な休憩を取って貰ったお蔭で高度障害もギックリ腰の再発も無く標高3,300mに無事到着することが出来た。ところが何と足が攣ってしまった。急いでツムラ68を飲んだが一向に良くならない。持参の岩塩も舐める。飴も舐める。それでもダメだ。小休止の度に左右のフクラハギを手で擦り、ポンポン叩いて騙しだまし歩くことと相成った。標高3,300mのアク・サイ（悪妻？）氷河のラツェク小屋が見えて来た時は本当にほっとした。悪妻でもゆっくり休ませてくれればそれでよい。小屋の前には小川が流れ花々が美しく咲き乱れている。氷河の融けた水は冷たく清らかである。別棟になっているレストラン棟は小じんまりしていて、8人が肩寄せ合って食べる料理は、ホーチンクイスナー（大変美味しい）。出口が低く頭をぶつけた人が何人かいたのは御愛嬌。トイレはガレキの坂道を乗り越えて、氷河が眼下に広がる絶好のビューポイントに建っている。豊富な水があるので水洗に出来そうだが・・・、キルギス国家の名誉のため写真撮影は自粛した。

18日、今日は標高4,500mを目指して3,300mから1,200mを登る。ガレ場が続く、ずっとずっと何時までも続く。高度差1,200mが全てガレ場だ。登るにつれて視界が広がり遠くの山が折り重なって見えてくる。小屋から見上げる位置にあった氷河の上流部が目と同じ高さになり、遂には下に見えるようになる。

対岸には今登っている山の影が映っている。こちらからは陽の当たる面が見えるためか雪が少ない。ガイドのヤリックさん、我々が歩きやすいようにコースを選びながら歩いてくれるのだが、ちょっと離れると判らなくなる。足が早い。コンパスが違い過ぎる。

時折、ゴーツ、と雷鳴の如き音をする。雪崩だ。雪煙が舞い上がり小石が飛び散る。遠目には小石にしか見えないが近くで見れば恐らく可なり大きな岩だろう。昼過ぎにウーティチェル頂上に立つ。4,552mだ。旧ソビエト時代に連邦B 1 ランクとされた山である。頂上からは向こう側の山が見えた。何時見ても、何処の山でも「山の向こうは美しい」。



(雪煙を挙げる雪崩)



(頂上から見るアク・サイ氷河)



(アク・サイ氷河を見下ろす)

頂上にて暫し感激に浸った後に下山を始めるがこれがまた難しい。兎も角滑るのだ。慎重に一步一步足場を確認しながら降りるのだが、ガレ場ザレ場の連続。足に疲労が蓄積されてくる。あと少しで小屋というところで遂に尻餅をついてしまった。苦労したのは私だけでなく他にも結構苦労した人が大勢居たようだ。

19日、ラツェク小屋でもう一泊してアラ・アルチャのゲストハウス迄を更に1,200m降る。2日前に登ったコースの逆である。7時00分、早目の朝食を済ませて2日間お世話になったラツェク小屋を後にする。小屋の周辺にあった数張りのテントも昨日の午後に撤収されたようだ。往路で気付かなかった風景を楽しみながら急坂を下る。途中、O氏が痛めていた膝腰痛で歩行が難しくなる。荷物を皆で分散してゆっくりと降りる。滝下の中間点を過ぎると傾斜が緩くなり、高山植物が見事に咲き誇っている。今日は日曜のせいか行き交うハイカーも増え、子供たちのグループもいる。間もなく16日に泊まったアラ・アルチャゲスト・ハウスに入り、荷物と再会する。夕刻、近くのトルコレストランにてカンパ〜イッ。美味しいトルコ料理とビールが我々を暖かく迎えてくれた。

◎ アチク・タシュBC〜アドバンスドBC（7月20日〜7月24日）

（秋田 記）

20日、空路オシュへ移動（空港11:00、フライト13:00〜オシュ空港着13:45）

今回のトレッキングの2つ目の目的地レーニン峰・ABCへの登頂のため、ビシュケクから国内線でキルギス第2の都市オシュへ移動、1時間弱のフライトである。道の両側には冷たい飲み物やスイカ、それにメロンやリンゴなどを売る露店が並んでいる。明日からは当分シャワーやベッドのないテント生活が始まるので今日は早めに就寝したいと思うが、しかし日が長く9時頃まで明るくて外も騒がしくなかなか眠れない。



（露店でリンゴやスイカにメロンを並べて売っている）

21日、ホテルを8:30に出発し、マイクロバスで標高3,700mにあるレーニン峰を仰ぐベースキャンプに移動。アルパインクラブのテント場に13:30到着した。バスは100kmを超える猛スピードで突っ走る。ドライバーを信用するしかない、4時間近くのノンストップドライブで大草原を疾走、突然左折して未舗装の道路に入った。其処からは何かに確りと捕まってないと車の天井に頭をぶつける程のデコボコの草原の中、道なき道を走って行く、写真のような川原も2か所ほど渡河する。



(草原の中の川を横切る)

草原には家畜を放牧しているキルギス族のユルトが見られる。1時間程でレーニン峰を真正面に仰ぎ見ることのできるアルパインクラブのテントサイトに到着した。5～6人用のテントに2人がゆったりとできて快適そう。テントの周りではお花畑が何処までも素晴らしい！ダイニング用のテントで少し遅いキルギス風昼食とお茶を楽しんだ。



(草原には家畜を放牧しているキルギス族のユルトが見られる)



花の向こうにレーニン峰が見える筈だが、今日は未だ姿を現していない





(キルギス風昼食)



(夕食風景、色々な国から登山を楽しみに来ている)



(次の目標であるレーニン峰を望むABCに向けて手前のBCにキャンプ)

◎ 次の目標であるレーニン峰を望むABCに向けて手前のBCにキャンプ

22日、BC近辺の山をトレッキング（9：30 発～4,020m 11：20～下山 12：30～14：00 着）。今回は高所順化を兼ねてテントの目の前に見える山の尾根にフラワーハイキングに出かけた。途中で川を渡河し、尾根を登り稜線に出ると平坦な道となる。ガイドのヤリックは足が速くついて行くのが大変だ（平均年齢72歳を考慮してくれ）。下とは異なる花の群落、草原に点在する湖を望む。素晴らしい、これがキルギスの山か。雪のある手前で記念写真を撮り下山する。道のない急坂（4,020m）を慎重に下りる、そこは砂礫だらけの坂道で、まるで富士山の須走のようだ。



傾斜度 $30^{\circ} \sim 40^{\circ}$



23日、前進BCへ移動（歩き隊）8:00 発～ABC12:20 着（乗馬隊）BC9:20 発～ABC13:40 着

いよいよ今日は4,200mにあるABCへ、歩き組と乗馬組に分かれて出発した。天気は曇り空、歩き組は登山口まで車で送ってもらおう。なんだか得した感じで一時間位短縮できただろうか。登山口から直ぐに右手に大きな滝を見て草原のお花畑（野生玉ねぎのある）を楽しみながら行くと、マーモットが此方を警戒しながら見守っている。赤茶色の峠への急なジグザグな登りが続く。ザレ場状態で道が狭く、写真で見るより急坂です（傾斜度30°～40°位）乗馬組はこんな所を馬で登り下りすると思うと恐ろしい、歩きでよかったー！





12時過ぎにやっとキャンプ地に到着、此处からのレーニン峰は圧巻と言われているが、山頂部は雲の中。馬で来たOさんはすでに到着していたが、歩き組では一番の到着でした。約1時間後に乗馬組も到着、揃ったところでダイニングのユルトでティータイム、矢張り馬での峠越えは怖かった様である。



下のBCにいた登山者の殆どがABCに移動してきたのでダイニングのユルトは賑やかである。夕方からは雨模様で、自分は体調が悪くて此处で出された食事は食べられず、持参の日本食で済ますことにした。BCで食べたサラダが……？どうも腹の調子が悪いので早めにテントに入り休む。雨が強く降り出した。

24日、BCへ下山（歩き隊）ABC9:10 発～BC13:20 着（乗馬隊）ABC9:40 発～BC12:40 着

此处にいる殆どの登山者が今日はABCに滞在してレーニン峰を目指すようである。下山するのは我々だけで今回も歩き組と乗馬組に分かれて出発する。レーニン峰登頂を目指すN氏とは此处から別行動となる。下山する我々を途中まで送ってくれる。無事の登頂を祈る！朝降っていた雨は上がり曇り空で、ついに此处からのレーニン峰は見る事が出来なかった。N氏に素晴らしいレーニン峰の全容写真を託して下山道は昨日登ってきた道を引き返す。



今日もレーニン峰は全容を見せず（出発前に撮影）

4時間程で登山口に到着し、キャンプサイトの責任者が車で迎えに来てくれた。調子が悪いので、感謝！感謝！到着後、調子が悪くテントで休んでいると、外で女性達の笑え声がする。テントから出ていくと近くにあるキルギスの子供たちと片言の英語で交流中。男性にはカルパック（キルギスの民族帽子）、女性にはスカーフをプレゼントされ、近くにある彼女らのユルトに招待される。



◎ ABC～チツカン溪谷～イシク・クル湖（7月25日～7月30日）

（岡田 記）

ABC（4,200m）からBC（3,700m）に500m下っただけで空気が濃くなったようだ。氷河を直近に、レーニン峰周辺の5～6,000メートル級かと思われる雪山の荒涼としたキャンプは、何か息苦しい思いで癒される場ではないようだ。そして終始曇り空の故にN氏が目指すレーニン峰は姿を見せなかった。それに比べ草原の中のBCはなんとのだかな休息地だろう。遅めの昼食は例のジャガイモのスープ、そしてデザートは西瓜。みんな目的を果たした安堵感に浸っているようだ。前方の女性陣のテントにユルトのお嬢さんたちが遊びに来たようだ。皆の笑い声が。そのうち男性陣にフェルトの民族帽、女性陣にスカーフが届く。「買ってくれ」というのかと思っていると、どうも違うようで、プレゼントだった。それにし

ても全員に頂くとは、彼女の判断ではないだろう。



ユルトに招待される



キルギスの少女ハイジ



例の関野さんから戴いたディズニーの時計の効果（時計を丁度11歳の誕生日になるという女の子にあげた）で、お母さん（馬方の社長）の指示があったのかも知れない。この地で初めて会った客から時計をプレゼントされるなんて信じられない出来事だったろう。その後、彼女たちの住居（ユルト）を見学させていただく。午後のBCの時間が静かに過ぎてゆく。

夕刻時、一昨日とは大違いで、前は台湾（高雄）パーティが20数名、オーストラリア・パーティが8名、そして我々が8名と食堂は満員状態だったが、今夕は我々だけである。それにしてもガイドのヤリックはどうしたのだろう。BCに到着以来顔を見せない。明日から交代するガイドは未だついていないのだろうか？就寝直後21時をまわったころ、自動車のエンジンの音、暫くして隣のテントに人の気配、話し声が聞こえる・・・



25日、曇りのち晴れ（アチク・タシュ BC→オシュ 陸路移動 280Km7 時間）

早朝6時、周辺の散歩に出かけると、食道横で小柄で日本人と見違えるような女性と出くわし、挨拶を交わす。「グッドモーニング」昨日来、テント場では見慣れない方である。もしかすると・・・朝食時、2人の女性が笑顔で現れる。「皆さんお早うございます、私達は今日から同行させていただくガイドのケンジュと通訳のアイヌーラです」と流暢な日本語の挨拶に驚くとともに、後半5日間の未知の地域の案内役に安心感が広がる。

ガイド：ケンジュ（ドイツ語）ITMC 所属 W, 35～36 歳

通訳：アイヌーラ（日本語）日本センター所属 W, 35～36 歳

（注）ケンジュさんはスイスに留学したという、アイヌーラさんもキルギスの国立大学国際関係で日本文学を学び、その上で日本センターにて日本語を再び学んだというエリートである。



（ガイドのケンジュさんと通訳のアイヌーラさん）

いよいよ、今回のキルギストレッキングもアチク・タシュBC、レーニン峰ABCと4日間を過ごしたキャンプ地を後にする。残念ながらレーニン峰の頂きを見ることなく、往路の出発点、ビシュケクまで、3日間をかけて陸路を戻ることになった。（ビシュケクからオシュの往路は飛行機で45分間、2日間）9:00 アチク・タシュBCのスタッフ、ユルトのお嬢さん方の見送りを受けて出発する。往路同様、無舗装の平原を前後左右に大揺れしながら約1時間30分、国道からの分岐、キィブイル・スウ川の小さな鉄橋を渡ると左にダラウト・クウルガンからタジキスタン方面に続く国道に出る。この平原（標高2,800m）の道は支流のアチク・タシ川に沿っているようだが、別の車道もある。大雨でも降れば道はすぐ変わるのだろう。

右にオシュ方面への道を30分程、サルィ・タシ集落（3,160m）の交差路に出る。東に中国のカシュガルに、北はオシュ方面。ここで思わぬ出会い。アジアの国々を自転車ツアーで3年ほど、あと2年間は続けたい、という広島出身の高木氏に出会う。最初、我々を中国人と思ったようであるが、我々の話を聞いて日本人だと判ったようだ。長旅の姿は想像を絶するものだったが元気そのもの。女性陣がキャンディーや味噌汁など、日本の味を差し上げ、目的達成を祈って別れる。



(こんな処に日本人が・・・)

BCでのKAC（キルギス・アルパインクラブ）社からの招聘でレーニン峰の調査に来ていた早稲田大学山岳部主将の犬塚氏と会うなど、“こんな処に日本人”の思いである。途中、ユルトのレストランでトイレ休憩、馬乳酒が飲める処のようだがガイドの忠告で残念ながら断念。慣れない外国人は必ずお腹を壊すそうである。予定より早く街中に着いたので、バザールに立ち寄るも、車の長旅で疲れ気味なので早々に引き揚げサンライズホテルに向かう。

26日、晴のち曇（オシュ→チッカソソ谷オゾン・ゲストハウス 陸路移動 450km 約8時間）

9:00 オシュ、サンライズホテルを出発する。シルクロードの街ウズケン・ジャララバードの街を經由してビシュケクへ向かう中間点の宿泊地（チッカソソ谷）までの長いコースである。往路は飛行機で45分程度の距離を復路はランドクルーザーで2日間かけて移動するわけだ。キルギスの荒涼とした4~5,000メートル級の山々が林立する山岳部、遊牧民の生活を目の辺りに見る平野部。ポプラ並木、清流際の集落、シルクロードの現在を知る良い機会である。ガイドのケンジュも長時間の移動に飽きることのないよう、キルギスの歴史、政治、経済、文化と、広範囲にわたり熱心に説明してくれる。難しい内容もアイヌーラ（通称アイさん）の明解な通訳で理解を深めてくれる。予定より早くトトガル湖の近く、清流際の森の中にあるロッジ、オゾン・ゲストハウスに着く。付近には散策路もあり、まさに現在のオアシスのような絶好の癒しのサイトである。14:40 チッカソソ谷オゾン・ゲストハウス着



(森の中にあるロッジ・ゲストハウスで会食)



(大きなメロン)

27日 晴のち曇（チッカン溪谷オゾン・ゲストハウス～ビシュケク・アルピニストホテル）

8:15 オゾン・ゲストハウスを出発、この地の標高は2,500～2,600mのようだ。森の中の朝の空気は格別である。溪谷沿いの山間部を唸りをあげて登りだす。アラベル峠（3,184m）～ツアッシュ峠（3,586m）を超えると急激に高度を下げ、平野部が広がってトゥモロコシ畑が続く。民家が見え出すと道路際にスイカ売りの店が多くなる。



9日ぶりに今回の出発点ビシュケクに戻った。緑の多い美しい街である。ドライバーお勧めのレストランで昼食後、児童図書館の中にある書店でキルギス全体像の地図を購入（この地図が帰国後の行動記録の記述に大変役に立っている）する。書店の近くにあるキルギスの物産店に案内される。絨毯、壁掛、フェルト類の小物や蜂蜜などの定番商品が並んでいる。その帰路、ビシュケクの3大バザールのひとつオシュ・バザールに立ち寄る。この地の特産品である各種のナッツ類を購入する。夕食は街中の瀟洒なトルコ料理レストランに。先の19日のトルコ料理は野菜中心のメニューだったが今晚は冷えたビールに肉炒め料理で久しぶりに満喫した。



(バザールでナッツ類を購入する)

28日、曇のち晴 (ビシュケク・イシク・クル湖)

予備日は当初、市内観光を予定していたが、「キルギスに行くなら多くの伝説を秘めた幻の湖イシク・クル湖へ行くことをお勧めする」との話を聞き、心を動かされる。しかし、ビシュケクからは約260キロ、往復8時間の長丁場に、連日の陸路移動の疲れもあり、できればキャンセルしたい気持ちもあった。しかし、「地球の歩き方」の紹介文はあまりにも魅力的なものだった。「天山山脈の山肌深く・・・“中央アジアの真珠”・・・“キルギスの海”・・・“湖底に消えた道”・・・“玄奘三蔵がインド行の途中に寄り”・・・“シルクロードに強い関心を持っていた作家、井上靖も訪れることが出来なかった湖の美しさや神秘性”・・・と」ここまで書かれると、この機会を失することは出来ない気持ちになっていた。8:10 ガイドのケンジュの出迎えで出発するも、K氏の体調が悪いようだ。後の席で横になっているというが、長時間の往復を考え、ホテルから15分程行ったアイさんとの待ち合わせ場所から戻ることになった。前半は総じて元気だったメンバーも後半になって体調不良を訴える人が出始めた。やはり疲労のせいなのだろう。イシク・クル湖への道はシルクロードのメインロードである。左手(北側)のカザフスタンの国境沿いに進む。右手(南側)にはキルギス唯一の鉄道が並行している。途中、道路際のレストランで昼食(有料トイレは5サム:10円)右手に湖が見え始めてから約1時間、湖岸最大の避暑地と云われている Cholpon-Ata に着く。

町を散歩することなく有料海水浴場に入る。中央にホテル、周辺にレンタルロッジ、草花が美しく咲き誇っている。小さな海水浴場には子供たちが水遊び。大人達はパラソルの下で日光浴。そして我々は琵琶湖の9倍と云う大海の静かな岸部の東屋で、物思いにふけりながらではないのだろうか、スイカを食べている不思議な光景を現地の人にはどう映ったのだろうか。いみじくもアイさんから「この湖に来ることを決められた理由は」と聞かれてしまった。・・・“神秘的な幻の湖”で不思議な時間を過ごした後、思い思いの想い出を持って帰路につく。

ホテルで休養していたKさんを誘い韓国料理店へ。日本語の上手な店長の勧める各種の大盛り料理を堪能する。最後に今回の後半4日間の陸路移動旅を楽しく有意義に案内して下さったガイドのケンジュ。名通訳のアイヌーラさんにお礼を述べる。なお、この席にITMCの窓口であるマルガリータさんとお会いする予定であったが、他の事故の対応のため残念ながらお会いできなかった。



(イシク・クル湖畔)

帰国にあたっての荷物整理。残金のソムを使うべく、近くのスーパーマーケットへ最後の買物。11:30 ケンジュさんの出迎えで早めに空港へ。トラブルなく搭乗手続きを済ます。旅の後半に体調を損ねた人も全快し、長旅の余韻に浸りながら定刻 16:20、モスクワ乗継 17:55 (19:00) 成田 30 日 11:00 着。なお、モスクワでの乗り継ぎ時間が短かった関係からか全員の預け入れ荷物が未着との連絡を受け、翌日に自宅配送の手続きを済ませて全員無事に帰着した。

◎ 今回を振り返って

(古林 記)

今回のトレッキング、海外山行はこれまでの単なる山登り、あるいは観光旅行と言ったものとは一味違った内容となった。知識上で事前の習得が出来ているヨーロッパやアメリカなどとは異なり、見ることも聞くことが新鮮であった。登山ということ以前に新鮮な風景や聞く話に心が動かされる。中学の教科書で習ったことのある遥か遠い場所に、実際に足で歩くことが出来たという実感。あの話に聞いたシルクロードや天山山脈、それに黄河などという名前と其処彼処で遭遇。テレビで聞いたことのある何々スタンという国々が文化や歴史と共に現実の国際紛争などを直接見聞きするに及んだ。同じ顔形をしたモンゴロイドに親しみを感じながら、言葉が通じない中でそれら現地の人と親しく交流を図って、楽しい時間を持てたことが嬉しかった。

・ 手作りの海外山行に手ごたえを感じた

今回のトレッキングは既成の海外ツアーを利用することなく、手作りで自前のセッティングで計画から実施までが行われた。現地での言語はロシア語かキルギス語が公用語で日本語は勿論、英語も通用しない国である。街に出ている看板もアルファベットの文字ではなくキリル文字を使用して表記されたアルファベットであり、そのまま読もうとしても判読できない。中国語なら何とか漢字の意味がそれなりに推測出来るが、キリル文字はさっぱり判らない。そんな見ず知らずの国に、言葉も通じない国に自前のセッティ

ングで行く訳だから、大胆な企画と言わざるを得ない。現地の山岳アルパインガイド企業と連絡を取って、eメールでの事前折衝だけで現地入りをした。前提として英語の判るガイドをつけることとしていたので、それだけが頼りの綱というところだった。しかし結果的には登山中は英語の出来るガイドが、帰路では長い車の道中だったが、お喋り上手なガイドと日本語の達者な通訳がついて、一生懸命にそれこそ長時間に亘って日本語で歴史や文化、国際問題を紹介してくれた。このことでトレッキングというがそれ以上に歴史と文化と新しきを知るツアーになった。

・ タフなコースだった

今回はトレッキングという呼びかけで企画をしたが、現地から送られてきた資料では、到着後直ぐに標高が4,500メートルの登山となっていた。飛行機で着いた直後に直ぐに登るのはキツイなと思っていたが実際にその通りとなった。殆ど寝ないで乗り継ぎの19時間後の早朝の空港に到着後アラ・アルチャという山の麓（標高2,100m）に入って早速足慣らしの2時間登山。その翌日にはそこから3,300メートルへ、さらにその翌日には4,500メートルへと。その段階で8人中3名ほどが体調不良。平均年齢72歳ではかなりタフなコースだったといえる。あとで聞いた話では飛行機のついた当日のビシュケクは摂氏46度の高温を記録して非常事態省が緊急情報を発信したという話だった。

・ 思い出に残る出来事に遭遇

今回はいろんなハプニングに出くわした。こんなところに日本人が、というような人に出会ったり、乗っていたマイクロバスがパンクで故障したり、ギリギスのハイジともいうべき少女と仲良くなったりである。しかし今回、特に印象に残った出来事と言えば馬に乗って山を登ったことが挙げられる。私自身は以前にも馬に乗ったことはあるが、その時には元気な馬には危ないからと、わざわざ老馬に乘せられたのだった。しかし今回はそんなことにはお構いなく、急峻な山岳地帯を御者が手綱を引くこともしないで勝手に登らせるといふ、実に衝撃的なアドベンチャーを実感したことだった。恐らく日本や他の何処の国でもこんな危険なトライアルは絶対にさせてくれないものだと思う。

今回の場所はヨセミテ渓谷のような標高差が百メートル以上もある渓谷の、厳しい切れ落ちた壁面の斜面に沿って幅50センチほどの、いまにも崩れそうな砂利道をアップダウンしながら4~5時間を進むのである。坂を上るときは後ろ手に鞍の端を握り締め、下に下るときには前にある鞍の縁を掴んで体を後ろに反り返らさないと馬から落ちそうになってしまう。鐙なるものにつま先を突っ込んではいないが馬が両側に恐らく30キロくらいずつの荷物を背負っているのだから、それが邪魔をしてまともに踏ん張ることが出来なく中ブラの状態。それでも時には鞭を右手に持ち代えて、左手には手綱を握って、死に物狂いで(大げさではない)馬を左右にコントロールしながらジグザグにコースを進めて行く。これが初めての乗馬経験なのだから呆れるほどのチャレンジだ。急角度に流れ落ちる眼下には数百メートル下に氷河が悠揚とした雰囲気の流れ、その上を見渡す断層には数万年の眠りから覚めた茶褐色の砂岩が紺碧の青空と見事に調和して大パノラマの展開だ。馬上から見る大スクリーンは1,000万ドルに値する。この大活劇、お陰で尻の皮が剥けて出血した。完治したのは帰国後5日目頃である。

・ 掛かった費用

今回のトレッキングにかかった費用の概算は1人当たりで約35万円。その内訳としては、航空運賃が12万円。現地の山岳ガイド会社に14万5千円、現地諸経費として3万円（食費、ポーター、ガイドチップ、観光代金）、それに個人出費の諸経費として概算5万円（食費、お土産、乗馬代金など）で、合計34万5千円である。

以上

